

キリスト教学専修

**\*第二演習・2017年度後期\*\*\*\*\***

**A. 予定** (同学年は五十音順)

第12演習室:

木曜日隔週・2コマ → 1コマ1人 (+火4時限目、5時限目も可能)

60分の発表+30分の質疑応答

担当者は資料を準備の上、発表。パワーポイント使用可。

追加の発表を希望する人は、火曜日4時限目(キリスト教学研究室)に発表を設定する。

5時限目を利用して、対面チュートリアルを随時実施する。初回は10月24日。

**B. 関連するプログラム**

1. 研究室紀要の刊行: 3月刊行

- ・第二演習での発表 → 論文、書評、サーベイ
- ・特別研究発表会: 年2回、9月初旬と2017年3月中旬
- ・学会発表の予行+書評・サーベイ
- ・原則的には: 大学院生全員が参加(博士後期課程だけでなく)

**C. その他**

**「バベルの塔」と言語の不思議——ノアの洪水以降の世界**

旧約聖書に掲載された「バベルの塔」の物語(創世記11章)は、古来より、多くの思想家や芸術家のイマジネーションを刺激してきた。現在、東京に続き大阪で開催のブリューゲル「バベルの塔」展で24年ぶりの来日となった、ブリューゲルの「バベルの塔」はその代表的なものであり、見る者の心を古代の不思議な世界へと誘ってくれる。「バベルの塔」には、科学技術や古代帝国などさまざまな観点からアプローチできるが、旧約聖書の「バベルの塔」物語に即して、言語の問題から迫ってみたい。現代世界における言語の問題は実に「バベルの塔」に遡ることができるのである。

**(1) ブリューゲルとその時代**

1. ブリューゲル(Brueghel)一族: フランドル。16世紀~17世紀に画家を輩出。

ピーテル・ブリューゲル(Pieter. 1525-1569):

「バベルの塔」(1565年頃。ブリュッセル時代)

2. 人文主義の教養人で農民作家

「人文学者たちと交友を持ち、都会の教養ある知識階級に所属しながら、しかも同時代人から「おどけ者ピーテル」とか「百姓ブリューゲル」と仇名されていた人物」、「数カ国語の知識とひろい知的好奇心と当代の技術への関心とを持ち、諸外国を旅し、人文主義的教養人でありながら、生涯にわたって職員や船員や狩人や、とくに農民と深く接し、かれらの生存の実体、風習、言語、作法、身のこなし等々に完璧に習熟していた画家」（中野、43-44）

3. 「15 傲慢（ヒュプリス）」：「ウィーン的美術館に一点だけ、いくら見ても納得できず、なにかわけのわからないグロテスクなものを見たという、ほとんど不快な印象を残したままになっている絵があった。」（中野、162）

「低くさがった地平に赤黒い不吉な色に染まった塔だけが聳え、手前の丘陵ももはや取払われ、地上も塔も何やらの襲来を待つかのようにいっそう暗い色彩に覆われている。これはまさに崩壊する科学技術文明の予言のような不吉な絵である。理性の傲慢がいままさにその応報（ネメシス）をうけんとしている寸前の光景のようである。」（中野、171）

4. ブリューゲルの時代＝宗教改革の時代（中世の終焉。人間の罪責性の自覚）

5. 「塔の下には豆粒のように見える多くの人間の姿が描かれている。そこからは、この支配者による壮大な工事のために動員された貧しい民衆の限りない労苦の続いてきたことがわかる」、「そればかりではない。このバベルの塔は、その壮大にもままわらず奇妙に歪んでいるように見える。塔の立地条件の悪さそのものが原因になっているのだ。」

「この絵に描かれた塔が傾き始めている姿には、プロテスタントを異端者として迫害するカトリック教会の強大に見える体制も、その崩壊がけっして遠くないことが暗示されているのではなからうか。」（宮田、2017.9、35-36）

6. 建物と土台：

・ 「そこで、わたしのこれらの言葉を聞いて行う者は皆、岩の上に自分の家を建てた賢い人に似ている。雨が降り、川があふれ、風が吹いてその家を襲っても、倒れなかった。岩を土台としていたからである。わたしのこれらの言葉を聞くだけで行わない者は皆、砂の上に家を建てた愚かな人に似ている。雨が降り、川があふれ、風が吹いてその家に襲いかかると、倒れて、その倒れ方がひどかった。」（マタイ 7.24-27）

・ 「わたしも言うておく。あなたはペトロ。わたしはこの岩の上にわたしの教会を建てる。陰府の力もこれに対抗できない。わたしはあなたに天の国の鍵を授ける。あなたが地上でつなぐことは、天上でもつながれる。あなたが地上で解くことは、天上でも解かれる。」（マタイ 16.18-19）

7. 「バベルの塔」はどこに建てられたのか。

## （2）旧約聖書のバベルの塔と言語の問題

8. 聖書と言語：「アダムから「言語の混乱へ」（エーコ、第一章）

・「完全言語の空想にとりつかれたのは、ヨーロッパ文化だけではない。諸言語の混乱のテーマ、そして全人類に共通の言語を発見または発明することによって混乱を矯正しようとする試みは、古今東西のすべての文化に共通して見られる。」(エーコ、20)

・人間世界は、そして自然も言語的である。聖書の宗教は言語的である。

「初めに、神は天地を創造された。地は混沌であって、闇が深淵の面にあり、神の霊が水の面を動いていた。神は言われた。「光あれ。」こうして、光があった。神は光を見て、良しとされた。神は光と闇を分け、光を昼と呼び、闇を夜と呼ばれた。夕べがあり、朝があった。第一の日である。」(創世記、1.1-5)

「主なる神は、野のあらゆる獣、空のあらゆる鳥を土で形づくり、人のところへ持って来て、人がそれぞれをどう呼ぶか見ておられた。人が呼ぶと、それはすべて、生き物の名となった。」(創世記、2.19)

9. 旧約聖書の神話世界：アダム（楽園・楽園追放）からノア（洪水・第二創造）、ノアからアブラハム（イスラエル民族）

楽園追放と洪水以降。人間の罪の現実は物語の前提となっている。罪と罰における救済の歴史。

10. 言語の一致＝諸民族の相互理解・協力、言語の混乱＝諸民族相互の理解不可能

・言語の多様性の起源。自然と文化。

「10:1 ノアの息子、セム、ハム、ヤフェトの系図は次のとおりである。洪水の後、彼らに息子が生まれた。

2 ヤフェトの子孫はゴメル、マゴグ、メディア、ヤワン、トバル、メシエク、ティラスであった。3 ゴメルの子孫は、アシュケナズ、リファト、トガルマであった。4 ヤワンの子孫は、エリシャ、タルシシュ、キティム、ロダニムであった。5 海沿いの国々は、彼らから出て、それぞれの地に、その言語、氏族、民族に従って住むようになった。

6 ハムの子孫は、クシュ、エジプト、プト、カナンであった。7 クシュの子孫はセバ、ハビラ、サブタ、ラマ、サブテカであり、ラマの子孫はシェバとデダンであった。8 クシュにはまた、ニムロドが生まれた。ニムロドは地上で最初の勇士となった。9 彼は、主の御前に勇敢な狩人であり、「主の御前に勇敢な狩人ニムロドのようだ」という言い方がある。10 彼の王国の主な町は、バベル、ウルク、アッカドであり、それらはすべてシニアルの地にあった。11 彼はその地方からアッシリアに進み、ニネベ、レホボト・イル、カラ、12 レセンを建てた。レセンはニネベとカラとの間にある、非常に大きな町であった。

・・・19 カナン人の領土は、シドンから南下してゲラルを経てガザまでを含み、更に、ソドム、ゴモラ、アドマ、ツェボイムを経てラシャまでを含んだ。 20 これらが、氏族、言語、地域、民族ごとにまとめたハムの子孫である。」(創世記)

「11:1 世界中は同じ言葉を使って、同じように話していた。2 東の方から移動してきた人々は、シニアルの地に平野を見つけ、そこに住み着いた。3 彼らは、「れんがを作り、それをよく焼こう」と話し合った。石の代わりにれんがを、しっくい代わりにアスファルトを用いた。4 彼らは、「さあ、天まで届く塔のある町を建て、有名になろう。そして、全地に散らされることのないようにしよう」と言った。5 主は降って来て、人の子らが建

てた、塔のあるこの町を見て、6 言われた。「彼らは一つの民で、皆一つの言葉を話しているから、このようなことをし始めたのだ。これでは、彼らが何を企てても、妨げることはできない。7 我々は降って行って、直ちに彼らの言葉を混乱させ、互いの言葉が聞き分けられぬようにしてしまおう。」8 主は彼らをそこから全地に散らされたので、彼らはこの町の建設をやめた。

9 こういうわけで、この町の名はバベルと呼ばれた。主がそこで全地の言葉を混乱（ババル）させ、また、主がそこから彼らを全地に散らされたからである。」（創世記）

11. 言語：「自然—文化」コードの基本（言語は人間の自然本性・DNA に基盤をもち、歴史の中で具体化し多様な文化を生み出す）。

→ 通時的言語学（19世紀、歴史言語学）と共時的言語学（20世紀、構造主義的言語論）。災害は、「天災+人災」という形を取る。

12. 神話の思考構造（レヴィ＝ストロース）

人間存在の基本的矛盾の自覚 → 矛盾の漸近的解決

二項対立（人間存在の宿命）

生—死、神—人間、天—地

生—死 → 農耕—戦闘→ 狩猟

自然—文化、男—女

### （3）言語から見た聖書の深層構造

13. 聖書の神話構造（1）：エデン神話

自然・文化の未分化 → 自然・文化の分裂、対立 → 対立の解決（回復）

命の木

↑

↑

善悪の知識の木

罪（歴史の開始）

救済史

神—人間

メシア（媒介者）・終末

自然—文化（労働・罰）

男—女 生—死

14. 聖書の神話構造（2）：バベル神話からペンテコステへ

アダムの言葉 → 言語の多様化（分裂） → 多様性・対立の統合の試み

①自然的分化(Gen.10)

イスラエルの契約

②バベル・混乱（Gen.11）

自然—文化／1—多

→失敗

→キリスト教・ペンテコステ(Acts.2)

バビロン捕囚

多様性におけるコミュニケーション

言語の豊饒さの統一

「2:1 五旬祭の日が来て、一同が一つになって集まっていると、2 突然、激しい風が吹いて来るような音が天から聞こえ、彼らが座っていた家中に響いた。3 そして、炎のような舌が分かれ分かれに現れ、一人一人の上にとどまった。4 すると、一同は聖霊に満たされ、

“靈”が語らせるままに、ほかの国々の言葉で話した。5 さて、エルサレムには天下のあらゆる国から帰って来た、信心深いユダヤ人が住んでいたが、6 この物音に大勢の人が集まって来た。そして、だれもかれも、自分の故郷の言葉が話されているのを聞いて、あっけにとられてしまった。7 人々は驚き怪しんで言った。「話をしているこの人たちは、皆ガリラヤの人ではないか。8 どうしてわたしたちは、めいめいが生まれた故郷の言葉を聞くのだろうか。」(使徒言行録)

#### (4) なぜ神は言語を混乱させたのか。

15. 「傾いたバベルの塔」。このまま工事を続けるとどうなるか？ 未曾有の大崩壊！  
脆弱な土台に巨大建造物を作るという人間の愚かさ → 巨大な災害。
16. 「ノアの大洪水」という大災害を回避するという前提。
17. 「バベルの塔」の工事を中断させるという神の判断？
18. 現代の科学技術とそれを使用する人間は十分に賢明なのか？

#### <参考文献>

1. 中野孝次『ブリューゲルへの旅』文春文庫。
2. 宮田光雄「ブリューゲルと宗教改革(上)(下)」(岩波書店『図書』2017.8+9)。
3. ウンベルト・エーコ『完全言語の探求』平凡社。
4. レヴィ＝ストロース 『アスディワル武勲詩』青土社。
5. 小田 亮 『構造人類学のフィールド』世界思想社。
6. 吉田敦彦『日本神話の特色』、『日本神話のなりたち』青土社。
7. 大林太良『日本神話の構造』弘文堂、『神話の系譜』講談社学術文庫。
8. ノーマン・ペリン 『新約聖書解釈における象徴と隠喩』教文館。
9. ロラン・バルト他 『構造主義と聖書解釈』ヨルダン社。
10. ダニエル・パット 『構造主義的聖書釈義とは何か』ヨルダン社。
11. エドモンド・リーチ 『聖書の構造分析』紀伊國屋書店。